新潮日本古典集成

浄瑠璃集

土田 衛 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第七〇回）
浄瑠璃集（じょうるりしゅう）

昭和六十年七月五日　印刷
昭和六十年七月十日　発行

校注者　土田衛（つちだまもる）
発行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　加藤製本株式会社

定価二二〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Mamoru Tutida, Printed in Japan, 1985.

ISBN4-10-620370-7 C0392

目次

凡例……三
傾城八花形……九
傾城三度笠……一〇五
仮名手本忠臣蔵……一五一
桂川連理柵……三三五

解　説……三九
付　録
『仮名手本忠臣蔵』初演役割番付……四一三
参考地図……四一四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

厖大な浄瑠璃の作品の中から、数点の作品を選ぶことは困難なことであるが、本集成には別に『近松門左衛門集』が用意されているので、それを除き、時代と作品の内容に配慮しながら、比較的恣意的に校注者の好みで四編を選んだ。本集成の目的である、一般読者を対象とする読みやすいテキストという方針に従って、次のような配慮をした。

〔本文〕

一、本文の表記は一切底本の表記に従わず、今日の読者に読みやすいことを念頭において、歴史的かなづかいで書き直した。したがって、漢字を仮名に、仮名を漢字に改めることは勿論、漢字も現在の標準的な表記法に改めてある。この本文を利用して底本を復元するのは不可能である。

一、浄瑠璃の句点の「。」は息継ぎの意味があり、散文の場合とは異なるので、底本の通りに施した。

一、通読しやすくするために、適宜一字アキを設けた。その一字アキは必ずしも散文における句読点の位置とは合致しない。語り物としての韻文的な文脈の流れも配慮して設けたものである。

一、会話の部分には「　」を付して、他の部分と区別した。これは文字譜の「詞」とは当然一致しない。

一、節章は省略を原則とした。墨譜はすべて省略したが、文字譜のうち次のものは活字のポイントを小さくして、本文の行の中に残してある。

1　人物の登退場、場面の転換など、その他戯曲の構成に関係の深い文字譜。

「ヲクリ」「三重」「序詞……ヲロシ」、合の手の「へ」

2　浄瑠璃節以外の曲節で語られることを示す文字譜。

「謡」「歌」「ヲドリ」「オンド」「サハリ」「半中」「半太夫」「文弥」「相ノ山」「小室」「ハチタタキ」「サイモン」「順礼歌」「二上り」「三下り」など

底本には、通常これらの曲節が終るところに「ナヲス」という文字譜が付されているが、「ナヲス」は省略して、二字アキでその終りを示した。

一、浄瑠璃の戯曲構成を理解しやすくするために、改行を設け、改行ごとに頭注欄に見出しを付した。その改行は、原則として「フシ落」「ヲクリ」「三重」の部分である。

一、本文の中に挿絵を挿入した。底本には挿絵はないが、『傾城八花形』は絵入十八行本（旧赤木文庫・現大阪大学附属図書館蔵）の挿絵、『仮名手本忠臣蔵』と『桂川連理柵』は絵尽し（前者は慶応大学図書館蔵、後者は千葉胤男氏蔵）を用いて、本文の該当の頁近くに収めた。絵尽しについては、底本通りの見開きになるようにしてある。使用を許可していただいた所蔵者に厚く御礼申しあげる。

〔注釈〕

一、注釈は傍注（色刷り）と頭注とによって成る。傍注は現代語訳で、できるだけ自然な口語になる

ように努めた。頭注は読者の理解を深めるために、近世の資料も直接引用した。

一、頭注に引用した資料も、その表記は必ずしも原文の通りではない。現代の読者に適するように、表記を変えたり、句読点を補ったりしたところもある。漢文は本集成の方針に基づいて、原則として読み下しにした。

一、掛詞は頭注に説明したが、本文の傍注に（　）を付して、掛ける二語を示した場合もある。

一、挿絵の利用は読者の理解を深めると思われるので、近世の資料から適切なものを選んで掲載し、その出典を示した。

一、『仮名手本忠臣蔵』は各場を語った太夫が判明しているので、その場の冒頭の頭注欄に太夫名を記し、その太夫の特徴がわかるように、評判記から評判の一部を引用した。

一、本集成の方針により、本文の見開き二頁分に相当する頭注は必ずその二頁内に収まるように配慮したために、頭注に精疎が生じた。通読の便を考えた処置であるので、ご了解願いたい。

〔底本など〕

一、使用した底本は次の通りである。使用を許可していただいた各所蔵者に厚く御礼申しあげる。

『傾城八花形』　京都大学文学部図書室蔵、八行本。

『傾城三度笠』　松竹大谷図書館蔵、八行本。

『仮名手本忠臣蔵』　内山美樹子氏蔵、七行初版本。

『桂川連理柵』　大阪女子大学附属図書館蔵、七行本。

一、本文の校訂にあたって、次の諸本を利用した。ただし、読み方などの参考にしたのみで、諸本によって底本を改めることはしていない。底本が誤刻であると判断したときのみは、本文を他本によって改めているが、その場合には頭注欄にその旨を断わった。

『傾城八花形』　東京大学附属図書館蔵、十行本。大阪大学附属図書館蔵、絵入十八行本。

『仮名手本忠臣蔵』　七行再版本、架蔵。十行本、架蔵。

〔付録〕

一、巻末に付録として、『仮名手本忠臣蔵』の初演役割番付（西尾市立図書館蔵）と地図を収めた。地図は、寛延元年（一七四八）の木村寿陽堂板の『摂津国名所大絵図』と宝永六年（一七〇九）の吉田五郎右衛門板の『河内国絵図』の二図の一部をもとにした。前者は『傾城八花形』、後者は『傾城三度笠』の参考になろう。ご利用願いたい。

〔おわりに〕

一、『傾城八花形』と『桂川連理柵』の帯屋の段には、それぞれ「評釈江戸文芸叢書」の『傑作浄瑠璃集』上と下に樋口慶千代氏の注釈が、『傾城三度笠』には、「日本古典文学全集」の『浄瑠璃集』に横山正氏の注釈が、『仮名手本忠臣蔵』には、ここに列挙できないほどの多くの注釈がある。それらの先学から多大の学恩を受けた。厚く御礼を申しあげる。

浄瑠璃集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

傾城八花形（けいせいやつはながた）

一　月が野原の水に映るさまは、まるで光明蔵のごとくであり、蘭が春の山に芳香を吐くさまは、まさに古仏の心である。『江湖風月集』による序。「光明蔵」は仏語で、仏の光に満ちあふれたものをいう。

二　一堂の寺院。「精舎」は僧が仏道を修行する所をいう仏語。

三　摂津国西成郡。現在の大阪市の東部を除く大半。

四　今の都の京都に対して、昔の都の難波をいう。

五　「ずいりゅうじ」が正しい。「慈雲山瑞竜禅寺、難波村北の端にあり、黄檗派禅宗鉄眼和尚開基也。本尊、薬師瑠璃光仏」（『摂津名所図会大成』八）。但し同書には「伝云、往昔当寺創建なき時此地に淵ありて深沙が淵と呼り。其傍に薬師仏を安置せし小堂あり。村中の農民これを守護せし草堂也」とあり、「明庵」（注八）のことは記してない。俗に「なんばの鉄眼」と呼ばれ賑った。

〈瑞竜寺の場〉マクラ

六　禅宗の寺院。「鳳閣」はすぐれた楼閣をいう漢語。

七　人皇第七七代。神武以前の神代に対していう。

八　京都の建仁寺の開山である栄西の字。『三部経開題』『喫茶養生記』などの著者。明庵が渡唐した記録は仁安三年（一一六八）の三月から九月、文治三年（一一八七）三月から建久二年（一一九一）七月までの二回で、この文章とは合致しない。「沙門」は、僧。

九　寺院を建てて。「蘭若」は仏語。人里から離れ、仏道修行するにふさわしい閑静な所。転じて寺院をさす。

施主の女房の読経

傾城八花形

作者　錦文流

序詞　月野水に沈む光明蔵。蘭春山に吐く古仏心。まことなるかな一宇の精舎を眼前の。極楽世界と拝するは　つとめて至る所かな。

ここに摂州西成の郡　むかしの京の跡ふりし。下難波といふ片里に。慈雲山瑞竜寺と申す禅林の鳳閣あり。そも〳〵この御寺と申せしは　人の世すでに七十七世。後白河院の御時　明庵といへる沙門保元平治に入唐し。仁安の秋帰朝の節　薬師如来を守りたてまつり。蘭若をしつらひ引き籠り　悟りを開きたまひぬる。津の国一の霊場とてヲロシヘ諸人歩みを運ぶなり。

中にも五十の秋ふけて　つきも気配もなみ〳〵に。あらぬと見ゆ

る女房の　都めきたる風なるが。唐絵の掛絵を荘厳し　香華を手向け読経の。声もかすかにうちしをれ　涙もともに繰り捨つる。袂の数珠のかず〳〵の。思ひある身とうち見るにも　哀れさまさる風情なり。

ころは正治元年中秋下旬のことなつしに。右大将頼朝公の御家人。宇都宮弥三郎友綱　京都の守護にてありけるが。泉州天川の領主木戸兵庫正秋高。殿中にて口論し　即時に双方討ち果たし。いづれも領地を召し上げらる　されども諸家中城に籠り。皆討死と同心し城を明けざる所以によつて。友綱これをうけたまはり　早速城を請け取り　帰京に及ぶ道草の。露の間しばし色里の　枕借り寝る添ひ臥しや。伏屋といへる酒相手。ヨクリふかくぞ　へ色に染みわたる。

はや思ひ川。ふかみ草。根からうそなき実床の。うち解けて寝る夜を籠めて　日ごと〳〵の揚げ泊り。今日も変らぬ連駕籠に。のりの道にはあらねども　これも御寺に詣でらる。

一　中国風の絵画の掛軸。
二　仏語。仏具で仏像などを美しくおごそかに飾る。ここでは瑞竜寺の堂に掛絵を飾ることをいう。
三　仏語。仏前に供える香と花。
四　かずかずの思いを、涙とともに繰り出して、それを捨て去ろうとする。「繰る」「数珠」「かず〳〵」は縁語。「数珠の数」と「かず〳〵」は掛詞。
五　一一九九年。土御門帝の御代。鎌倉時代の始め。
六　「なりしに」の転化し　友綱、城明け渡しの使者たいい方。
七　将軍家と主従関係を結んでいた大名。
八　主として警察権を持って治安維持にあたる職名。
九　不詳。架空の地名か。
一〇　泉州天川の城請け取りの役目を果し、京都に帰る途中、瑞竜寺に近い大坂の色里に遊ぶのである。「帰京に及ぶ道」と「道草」、「道草の露」と「露の間」は掛詞。
一一　人物の登退場に用いる曲節。ここでは友綱・伏屋が瑞竜寺参詣のために駕籠で登場。
一二　恋の思いの絶えることのないさまを川の流れにたとえていう歌語。
一三　牡丹の異名（『本草和名』）である　友綱の登場が、ここでは恋の深みにはまることをたとえていう。
一四　心底に嘘のない実の心で、伏屋と実際に床を共にする。「うそなき実」と「実床」の掛詞。

一五 伏屋を揚げ詰めにして、連日泊り込む。　無量之介、掛絵の鑑定

一六 駕籠を二つ連ねて、仲よく物見遊山などにでかけること。

一七 仏語。法会などに多数集まっている僧。

一八 ふさわしくない色絵を掛けて。「色絵」は彩色した絵画。多くは浮世絵、風俗画などの場合にいう。

一九 僧の着用する衣服。

二〇 法事をとり行う主催者。

二一 玄宗は唐第六代の帝。開元の治と呼ばれる善政を行ったが、後半は楊貴妃を寵愛し安禄山の乱を招いた。虞氏君は秦代末期の項羽の寵姫。劉邦に包囲され、項羽と最後に唱和して自害した。虞美人ともいう。楊貴妃と虞氏君は時代も異なる人物であるが、時の帝の寵姫であり、絶世の美人で、古くより詩題・画題となった。

二二 容色をくらべ、后の地位を争うこと。美人くらべ。争いを勝負事で結着をつける例は多い。文徳天皇の皇子、惟喬・惟仁が位を争い、相撲の勝負によって結着をつけることになり、惟仁（清和天皇）側が勝って位に即いたという話は有名。

二三 神仙の方術を行う人。ここでは楊貴妃の亡き魂魄のありかを玄宗皇帝の命によって尋ねたという方士、楊通幽を想定しての文章であろう。

二四 庵室を建立するための費用。

二五 これがよい機会であって欲しい。

友綱参拝終つて後。大衆を一人招き寄せ。「拙者は田舎者なるが。御当地一見のため旅宿を求め。はう〳〵の堂舎仏閣残りなく　拝み巡り候ふ。見れば仏前に似気なき色絵を掛けさせられ。大衆みな〳〵法衣を改め　御法事の体いぶかしし。いかなること」と尋ぬれば。「オオ御不審ごもつとも。これに御入り候ふは　この掛物の主　今日の施主にておはせしが。御覧のごとく玄宗皇帝。楊貴妃虞氏君の二女を集め　色争ひの双六勝負。すなはち筆者は方士のよし。この施主家伝の形見なるが。取り伝ふべき人々も先立ち　空しうなりたまふ。よつてこの絵を宝に代へ　庵料となし出家を遂げ。亡き人の菩提をも　とひたき望みあるゆゑ。形見の名残りも今日ばかり　御望みならば絵は売物。さもなくば追福の座禅をなして行きたまへ」と。始終を語れば　友綱も哀れさ深甚肝に銘じ。「さて〳〵殊勝の物語。幸ひがな　某内々かやうの大掛物。望みに存ずる折なれば　買ひ得申し候ふべし。すなはち某家来塵塚無量之介土塊

（大衆）　（一の絵）　（相続して伝えてゆく人々）　（お金に代えて）　（死者の冥福を祈る座禅をして）　（買い求めて自分のものとしたい）

とて。絵を見る者の候へば　確かに唐絵か倭絵か。一目利きをさせて求むべし　それ無量之介」と召され。「和漢の道理を見分くべし。」（友綱）二

（無量之介は）かしこまつてさし寄り。つく〳〵と見て元の座に立ち帰り。「彩色墨色もつとも時代は古けれども。唐土絵では候はず。ことにぐわぎ三やう寸法合はず。（基本がまちがっています）四御道具にはなり申さじ」と申し上ぐる。友綱聞きたまひ　「さて残念のことどもや。申し分だになきならば　何とぞ求め申さんに。今一度吟味せよ。シテまた寸法合はぬとはいづれのことぞ」。（無量之介）五「さん候ふ　そのかみ玄宗皇帝は。好色第一の帝にて　多くの美女を集めたまふ。中にもこの楊貴妃虞氏君を月よ花よと賞でたまふ。虞氏君は楊貴妃の上に立たんとすすみたまふ。また楊貴妃は虞氏君の下に立たじと勇みたまふ。ある時帝寵愛のあまり　賭双六を始めたまふ。いづれなりとも勝ちたらんを一の后にそなへんと。二人の官女を左右にたて　玉座を中に構へ。すでに双六始まりぬ。楊貴妃は朱四のこひめ　虞氏君は朱三のこひめ。双方朱四朱三

一　鑑定。真贋・価値などを見きわめること。

二　倭絵（和）なのか、唐絵（漢）なのか、理論に基づいて鑑定せよ。

三　不詳。建築用語である「ぐわんぎやう（丸桁）」の転として、算用の意とする説もあるが無理であろう。画形か。

四　家具・什器の類で特に貴重なもの。特に茶道に用いる器物についていうことが多い。

五　さようでございます。応答の発語として用いる軽い言葉。

六　第一皇妃の地位につけようと。

七　中国の説話では、玄宗皇帝と楊貴妃が五位をかけて双六を争う。それ以後、五位は赤い衣であることから、重三（注一〇参照）・重四（注八参照）を朱三・朱四と改称することになったという。この説話を虞氏君と楊貴妃の双六に改めたところが趣向。『平治物語』の「叡山物語の事」にもこの説話が用いられている。この掛物の双六のさまは二三頁の挿絵参照。

八　双六の用語で、二つのさいの目が、共に四で揃うこと。最上の目である。「朱四……極上の目ゆへ、手数すくなし。……別して双六の内にても、重一・朱四をかくべつの上目と知るべし」（『双六独稽古』）

九　出て欲しいと願うさいの目。

一〇　双六用語。二つのさいの目が、共に三で揃うこと。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com